

第一章 北タイ山地の日々

カレン調査の始まり

はじめに、調査地との出会いと、その後の現地の変化について紹介する。

調査に入るためにまず、一九八七年三月から北タイの都チェンマイで、四カ月ほど過ごした。当時チェンマイ大学キャンパスにあった山地民族研究所¹⁾、チェンマイ大学図書館やパヤップ大学古文書館で資料を収集するかたわら、カレン語を学んだ。スゴー・カレン語を学ぶには、バプテスト派宣教師による言語テキストがあり、これを使って、先生について教わった。山地に向けて各山地言語で発信されるラジオ放送のスゴー・カレン語アナウンサーの一人であったケンゲさん²⁾にお願いした。その一方で、おりにふれてチェンマイ県、メーホンソーン県、チェンラーイ県の山地のカレン村落を訪ねて歩いた。そうした中で最終的に長期滞在調査の対象に選んだのが、セニヤキというムラ²⁾である。ここを調査地として

選んだのは、後に述べるように、セニヤキが属する行政村には、当初私自身の最大の関心であったキリスト教と仏教が競うように一九二〇年代頃から入り、それぞれに村内の拠点を形成していたこと、そして、セニヤキではその両方の影響を受けつつ、同時に精霊祭祀も活発に行われていたことが大きな要因だった。高原の美しさや過ごしやすさも、遠い道のりを覚悟してでもこの、カレン語でムスイキ〔チェム川の源〕の意〕と呼ばれる地域を調査地として選んだ大きな理由だった。

ムスイキは、チェンマイから北西に道なりに一六〇キロ、チェンマイ県の北西端にありメーホンソン県との県境に近く、タイの最高峰ドイ・インタノンの北側に広がる海拔千メートルの高原地帯である。この高原地帯一帯の人口の大多数はスゴー・カレン語話者である。日本であればさしずめ、高原リゾートとしてもはやされそうな、マツと落葉樹の混合樹林帯を縫って村々が点在する冷涼な土地である。ムスイキはメーチェム郡の北部一帯を成すのだが、郡庁のあるメーチェムに至るには、ドイ・インタノンの南側へ達する峠越えが厳しいため、東のチェンマイ近郊を経由して行かねばならない。面積の広いメーチェム郡にあつて、最もアクセスの悪い地域だった(図1-1)。

村へは、チェンマイから公共交通の乗り合いバス(ソンテオと呼ばれる、チェンマイ市内で走っている乗り合いタクシーと同じトラック型のもの)で行く。乾季なら五時間ほどの道のりで、一九八七年当時一日一便走っていた。この便は、その後山地とチェンマイの往来者が増え、九〇年代には二便に増やされた。バスは、チェンマイ北部近郊のメーリムから西の山へ入るが、全行程の三割くらいのところから、景観は山また山となる。道の両側の村の大半がモンやカレンの村である。この路線の終点がムスイキの中心地であるワツジャン(ジャン寺)という村である。その名の通り、寺がある。ここは二十世紀初頭にカレンが移住してきた頃には、先住者の痕跡が残っており、仏塔や古い仏像があつたという。現住のカレン

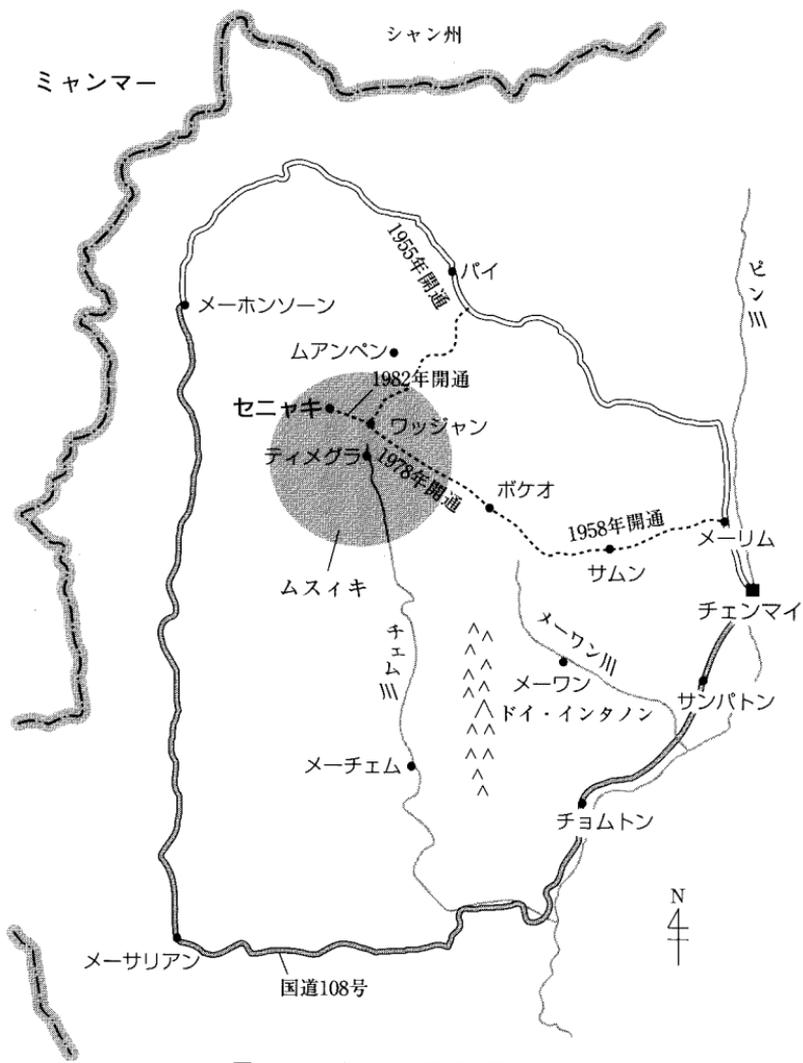


図1-1 北タイ北西部と調査地域



チェンマイからセニャキへ1日2便の乗り合いバス



セニャキへ向かう道から見る山の連なり

によれば、これは先住のラワ民族⁴のものであり、二十世紀初頭に各地からカレンがここに移住し始めた頃には、すでに先住者の集落はなく、仏像などの遺跡の断片が残るのみだった。その後一九二〇年代に北タイ全域で山地・低地を問わず崇拜された高僧クローバ・スイウイチャイがこの地を訪れ、村人を啓発し、寺が建立された。一方同じ頃、隣村のティメグラには、チェンラーイからキリスト教（バプテスト）のカレン伝道師が訪れ、キリスト教の布教も始まった。ここから、この地域へカレンが定住し、仏教とキリスト教が競うように共存する状況が生まれた。

初めてこの地を訪れたときは、このキリスト教徒のムラ、ティメグラに滞在した。当村出身の小学校の教師に案内してもらったのだが、西の方の山並みを指差して「あの山並みの向こうにもカレンのムラがあり、そこではまだ、精霊に供物を捧げる儀礼を行っている」ということだった。その山並みの向こうのムラの一つで、中でも定住の歴史の比較的長いのがセニヤキだった（図一参照）。ワツジャンから徒歩で一時間ほどのところにあるセニヤキは、ワツジャンの仏教寺と、ティメグラのバプテスト地区本部との両方の影響を受けていたが、同時に、上述の教師の口調からも推し測れるように、これらの先進的な村からみれば「いまだに」精霊儀礼を実践するムラでもあった。ここを調査地として選んだのである。

ムラの生活

セニヤキは一つの自然集落としてカレン語では「ヒ」（ムスイキ方言ではズイ、タイ語のムーティーにあたる）と呼ばれ、ここでは「ムラ」と表記する。タイ語でムーバーンと呼ばれる行政区は、セニヤキを含む

六つのムラからなる⁽⁵⁾。この行政区（ムーバーン）の当時の助役だったのが、セニヤキ在住のポカだった。私は、セニヤキでの調査が決まると、まずはこのポカ宅に居留することになった。助役であるポカのところには、近隣のムラも含め人々がよく出入りしていた。しかし、ここを本拠に過ごした数週の間に出会うことができたムラの女性たちは、ほとんどがキリスト教徒であった。聞けば、全四十三戸中の十七世帯がキリスト教徒、それ以外は「仏教徒」だと言う。仏教徒とは、調査開始当時ムラの人々が私に対して示した表現だったが、ムラにある「寺」の行事にも参加しながら、精霊儀礼を続ける人たちのことだと次第に理解するようになった。少しずつ言葉にも慣れ、ムラの中を歩き回るようになって、どうやら日々あちこちの「仏教徒」の家々では、儀礼が頻繁に行われているらしいことがわかったが、キリスト教徒のポカの家に滞在する限り、これらの儀礼を目にすることは難しそうだった。

そこでポカ夫妻とも相談の上、しばしば彼の家にも訪れて私も顔を見知っておりムラ内外で信頼も厚く、年頃の娘もいるチュエラパに頼み、彼の家に住まわせてもらうことになった。こうしてチュエラパ（パは父で、チュエラの父の意。このように、子を持つ男女には、長子の名に男性なら「パ」（父）、女性なら「モ」（母）を付して呼ぶ）一家との二十年にわたる親交が始まった。チュエラパ夫妻は、当時四十代半ばの働き盛りで、寺の委員も務め、かつ、精霊祭祀も怠らず、象を所有し経済的にもムラではポカ家と並んである程度余裕のある世帯だった。子供は二十一歳の長男チュエラを筆頭に七歳の末娘ノムボまで、すでに亡くなった長女を含めれば三男四女をもうけており、当時は八人が暮らす家だった。私は、次女で当時十五歳だったノジェボ（女性の名の前に「ノ」をつけて敬称とする）と寝所をともにすることになった。

ムラの朝は早い。未明にトリが一羽また一羽と鳴き声をあげる中でまどろんでいると、いつのまにか、隣で眠っていたノジェボはいなくなっている。暗い中で「バッコンバッコン」と床下から響いてくる。



足踏み式精米機で精米する（「米を踏む」）ムグロ

彼女が足踏み式の精米機でその日一日の消費分の米を搗いて精米しているのだ。これをカレン語で「ゾブ」（米を踏む）と言う。少し明るさの兆しが見える頃から「ザザー、ザザー」と、今度は、搗いた米を竹の箕の上でふるい分ける。家は高床なので、寝ていると家の周囲の営みが手にとるように音となって響いてくる。乾季であれば霜が降りる寒さで、朝まだき夫婦は家の外でも中の炉でも火を焚いて暖をとりながら、今日一日の仕事の段取りを相談し合う。精米を終え、娘たちが家の梯子を上がってくると、米を炊いて朝食の準備が始まる。煮炊きが進む間、水汲み、ブタの餌の準備など家中が動いている。ノジェポの家では、煮炊きは一番の料理上手の父チュエラパが主に担当していた。水汲みはノジェポを筆頭に子供たちが、そしてブタの餌やりは母チュエラモとノジェポの仕事だった。煮炊きの横で誰かが家の中を掃く。朝食が終わると、雨季であればバナナの葉に炊いた米を包んで弁当用にカゴに入れて持ち、これを竹製のバンドで額にかけて背負い、皆田畑へ



運搬のものを少女から帰る汲み水
のバンドは竹製の額にかけた
少女は竹製のバンドで背負う

と出かけていく。家々には乳児のいる若い母親や老人がいるだけである。彼らも一日のんびりしているわけではない。家畜の餌やり、洗濯、子守り、機織り、薪集め、夕食の材料探しなどをして過ごす。基本的に、家周りの仕事で、決まって誰がする、というものはない。「○○は誰の仕事？」と聞けば、「誰でも手のあいている者がする」という答えが返ってくる。ただし、精米とブタの餌やりを男性がするのは、妻が病気であったり子守りで手一杯のときのみであった。また、牛や水牛、象などの大型家畜の世話は男性がする。洗濯も、男性がするところはしばしば目にしたが、女性の擲楡の対象になるのは、妻のスカートを洗濯する男性である。後述するように、赤いスカートは既婚女性が穿くものだが、庭の果樹の幹に巻き付けて、実がなるようにまじないに使ったり、家族の成員の魂を呼ぶ儀礼の際には魂が最も寄りつきやすいものとして呼び戻す道具にされる。これは平地タイ人とも共通するが、一旦女性が穿いたものは、洗濯して干すときには決して人の頭より上に干してはいけない、男性は家の中に赤いスカートを穿いた女性がいるときに、家の下を通

つてはいけない、通れば男性の力が削がれる、と言われる。したがって、その女性のスカートを夫が洗濯するのは、ちょっと笑えることであるらしい。いずれにせよ、家周りの仕事のほとんどは、たしかに「手のあいている者がする」というのが最も適切な表現だった。夕方になると、田畑に出かけた者たちが、カゴに田畑の野菜や、タケノコ、キノコ、水

田のタニシやカニなど、夕食のおかずになるものを背負って帰ってくる。カレン語で食事の準備は、「ポオメ、トムサ」(ご飯を炊き、唐辛子を搗く)とセットで言われる。つまり、唐辛子を搗くことが、おかずを作ることとほぼ同義なのである。何もなくても、庭の野菜や香辛料をとってきて、唐辛子と塩と一緒に、チョトと呼ばれる木の臼で搗いて、炊いたご飯と一緒に食べるのが、食事の基本である。夕食が終わると、炉の火を囲んで談笑する。村内でお互いに訪ね合うのもこの時間帯である。互いにお茶を沸かし、漆や銀の器に入れた嗜好品のキンマやタバコを出してもてなす。若い男性(未婚の若い男性をボサクワと言う)は、数人のグループになって夜半まで松明を手に家々を渡り歩く。早い時間帯にはムグノ(適齢期の若い女性)たちを訪ね、時間が遅くなると、お互いの家に泊まり合う。

こうした日常の他、乾季ならば、婚礼や儀礼、家の建築や改築、そして機織りに忙しい。また、この時期にムラの周囲の森から薪を集めるのは主に女性たちの仕事である。男たちは水牛の世話や日雇いなどで出歩く。

セニヤキの二十年

私がセニヤキに調査で訪れるようになって二十年、村の生活は、目に見えるところでずいぶん変わった。初めて訪れた一九八七年四月、徒歩でムラの入り口まで行き着くと、そこから、眼下の谷あいには四十三戸の家々の屋根が点在する形で、斜面の中腹まで広がっていた。山地カレンのムラとしては比較規模の大きい方だった。入り口付近にバプテスト教会が建ち、ちょうどムラをはさんで点対称の位置、南西の斜面の上に寺が建てられていた。家々は、簡素な木の柱に竹を割った壁や床、フタバガキ科の葉

を編んだ屋根でできたものが三分の二、残る三分の一は、周辺の山から材木を切り出して建てた木造の家で、その中に数軒、当時流行だったトタン屋根の家があった(表1-1)。居住環境として、日中は照り返しが強い山の上でトタン屋根の家は暑く、雨季の豪雨には屋根を打つ雨音で会話も不可能となるので、決して居心地がよいものではなかったにもかかわらず、当時、威信財としてトタン屋根が求められ、貴重な水牛を売ってまで買い求める人々もいたのである。二〇〇〇年以降は、より気候に合った合成樹脂の屋根材が使用されるようになった。

水田や焼畑は、この谷から四方に広がって散在し、遠いところは村から歩いて二時間近くかかる。水田や焼畑には出作り小屋を建て、農繁期に泊まり込むことも少なくない。調査開始当時は焼畑への規制が厳しくなり始める直前で、水田では自給に不足する分を、小規模ながら焼畑の米作で補っている世帯も、四十三のうち二十一世帯あった。自給自足の稲作は、長粒のタイ米とは異なる在来の短粒のウルチ米を主として、モチ米も少々作っていた。水田の周囲や焼畑、家々の周りの菜園では、トウモロコシ、カボチャ、ウリ、カラシ菜、ナス、里芋、茶、タバコ、唐辛子、タマネギ、ニンニク、果物を作り、その中でも「焼畑でとれる米や野菜が一番おいしい」とよく耳にした。森ではタケノコやキノコを採集し、野ブタや小型のシカなどの獲物を狩猟していた(六十代の古老たちは、若い頃にはドイ・インタノンの森で虎野生の象、サルを狩ったという)。また自給農業で得られない現金収入は、近隣のフモンや北タイ人のムラでの日雇い農業労働、あるいは遠隔地への森林伐採などの季節労働で得ていた。家畜は、ブタ、トリ、水牛、牛が飼われており、臨時の現金収入源ともなっていた。一九八七年当時、象を飼っている家も二戸あった。象は威信財であると同時に村の内外では焼畑の整備や材木運び、村外では材木会社の切り出し作業、観光客向けの象のキャンプでの季節労働などにより、乾季には大きな収入源ともなった。しか

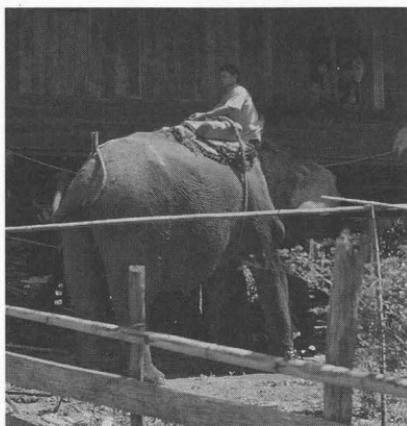
27†	18	3	3/0	0	0		木葉竹		
28†	26	5	0/10	0	0		木葉竹	妻公立中学	
29†	40	4	0/12	0	2		葉竹		
30†	66	2	0/5	2	1		木葉竹	長男 K	
31†	40	6	0/24	5	3		木ト竹葉		助役
32†	45	10	0/23	0	1	ウシ2	木ト竹葉	本人 C, 長女 K	牧師
33†	51	6	0/10	2	1		木ト葉		
34†	50	7	5/5	0	1		木竹		
35†	42	7	0/25	5	1		木ト竹葉	本人 C	養殖池
36†	32	5	0/6	1	0	ウシ2 トラック 1	木竹	本人教師養成	小学校教師 月300B 養殖池
37†	42	7	1/9	0	1		木	長女 K	
38†	50	6	0/20	1	3	ウシ3 ゾウ1	木葉		
39†	63	6	3/18	4	2		木		
40†	45	10	1/15	2	2		木	長男 K	
41†	21	3	0/6	0	1	耕うん機 1	木葉	本人 K	小売
42†	69	8	6/25	0	1	トラック 1	木	本人ビルマ聖書 学校	
43†	34	7	0/21	3	1		木竹		

注 1) ☆は世帯主が寺の委員, ★は世帯主と子の代 1 人が寺の委員, ☆*は委員長, †はキリスト教徒。

- 水田耕作では単位面積あたりの産高は毎年ほぼ一定である。水田の不足分を焼畑で補うが、産高は不安定である。産高は借地の場合借地代分を差し引いた値、貸主には貸し代分を加えた値。米の産高は収穫直後の籾米の体積で単位は「セ」。1セ=約280リットル。3セがおよそ大人1人1年食分。
- 伝統家屋は竹と葉という森の産物をそのまま使ったものであるが、木造とトタン屋根は購入されるもので、非常に目につくステータスシンボルとなっている。通気性をよくする意味でも、またオヘを行う家ではオヘ儀礼のために、炉の間のみ竹と葉で作られ、木造との折衷型としている家も少なくない。屋根は葉またはトタン(ト)または木の板、家の主要部分を木または竹、またはその両方を用いる。
- 教育に関しては最終学歴が中等教育以上の家族員について記した。Cは、チェンマイにあるカレン・バプテスト会議の指導者養成センター、Kはセニヤキから徒歩1時間のところにあるカレン・バプテスト会議が設立した公認の中学校に在学中または卒業。
- 「その他」には、定期・不定期の収入源、他世帯との共同や米の援助のある場合等を記した。カッコ内は世帯番号。B=パーツ(当時1パーツ=約3円)。

表1—1 センヤキ43世帯の生活指標 (1988年当時)

世帯 番号	世帯主 年 齢	人員	米の産高 畑/田	水牛	ブタ	その他の大き な家畜・機械	家屋	教育	その他
1★	47	8	0/18	3	2	ゾウ0.5 (他 村の親戚と共 有) 耕うん機 1	木葉	長男スインダ寺	
2☆	32	7	3/24	1	3		木竹		
3	22	4	2/4	0	1		葉竹		
4	48	7	6/10	3	1		葉竹		
5☆*	40	8	2/22	10	4	ウシ1 脱穀機 1	木竹	長男スインダ寺	小売
6	49	6	2/4	1	1		木葉		
7	56	3	0	0	0		木竹		松脂工場月 1700B
8	29	3	3/10	0	5		葉竹		
9	60	5	2/15	4	2		葉竹		
10	35	7	0/20	2	4		葉竹		
11	45	5	2/15	2	2		葉竹		
12★	47	10	2/24	12	3		木		
13	60	3	0/16	2	3		葉竹		
14	48	7	2/10	0	1		葉竹		
15	70	9	3/10	2	1		葉竹		
16	59	6	0/15	0	1		葉竹		
17	52	2	1/0	0	0		葉竹		妻の妹(1) 援助
18	70	2	0	0	0		葉竹		夫の甥(40) 援助
19	57	7	2/16	0	1		葉竹		
20	23	3	0	0	0		葉竹		妻の実家 (19)共同
21	29	3	0	0	1		葉竹		妻の実家 (39)共同
22	63	1	0	0	0		葉竹		息子(2,26) 援助
23	69	2	0	3	2		葉竹		義兄(22)援 助
24	50	3	6/10	1	3		葉竹		
25	43	11	2/10	2	1		葉竹		
26☆	27	4	0/10	0	3	オートバイ 1	木	本人スインダ寺	松脂工場月 1700B



チュエラバの象

し、水牛や象などの大型家畜の飼育は、ムラの周辺に豊かな森や休閑地があることが条件であり、九〇年代に入ると、二頭の象は飼育が困難になり手放された。

一九八九年にタイ全土で森林伐採禁止令が発令され、九〇年代になると焼畑は行われなくなり、一部の焼畑地だったところは常畑化して、換金作物が植えられるようになっていた。八〇年代当時からワッジャンにベースをおいた王立農業プロジェクトが換金作物の奨励を始めていたが、ある程度軌道に乗ったのは九〇年代半ばになってからで、それも毎年売れ筋の野菜が変わるので、ある年誰かがキャベツで当てると翌年は皆がキャベツ、次はシヨウガ、というように、あまり特定の作物が定着することなく、常に試行錯誤が繰り返されていた。また、ムラの内外の土地が換金作物の畑に使用されるようになり、土地利用に関してはムラの近辺は飽和状態になりつつあった（速水 1999）。

ワッジャンを中心とするこの地域は七〇年代から、さまざまな政策・プロジェクトの対象となり、官吏や国境警察、軍人、僧侶などの出入りが激しくなった。一九七八年にはセニヤキから徒歩で二十分の隣村に小学校とクリニックができ、私が調査を始めた八〇年代には、ワッジャンに拠点を置いたさまざまなプロジェクトがセニヤキにも波及し始め、セニヤキの人々は、隣村にある小学校やクリニックを利用するようになっていた。セニヤキを含む同じ行政区内の六つのムラから、この小学校に子供たちが



1990年当時のパいの町

通っていた。学校にはカレンの教師二名を含む四名の教員がおり、一名はセニヤキの人でチェンマイの師範学校の出身だった。クリニックの保健師は、三ヶ月の短期講座を経て資格を得た郡内の別村出身の女性が務めていた。当初、行政区内で公立医療施設はここだけだったが、薬が高い、必要な薬がおい

いない、保健師は留守がちである、などの理由であまり評判がよくなかった。そして少し重い病気であれば、ティメグラにあるバプテストの診療所を頼るか、隣県メーホンソン県パイ郡の郡庁所在地であるパイの町の病院まで、ムラに二台ある車のどちらかを頼んで五時間ほどかけて出かねければならなかった。最も近い中学はティメグラにあり、徒歩一時間ほどかかる。はじめに調査に入った頃は、この中学に通っているのはセニヤキからは二人のみで、いずれもティメグラの寮や親戚の家に寝泊まりし、週末のみセニヤキに帰ってきていた。

九〇年代後半にムラに電気が引かれ、生活のリズムも変化しつつあった。ただし、二〇〇三年時点で、自家へ電気を引くことができたのは全体の三分の一ほどの家だった。ムラに何軒かテレビをおく家があり、次第にそこに人が集まるようになった。私にとっては炉の周りでの談笑が格好の情報収集の場であったので、この傾向は調査にははなはだ不都合だったが、タイの都市中流家庭などを舞台にしたドラマを食い入るように見つめる

ムラの人々の顔を見ながら、加速する生活の変化を実感した。同じ頃、より良い条件の仕事に就くには教育が必要であるという認識が高まり、ティメグラのみならず、遠くパイの町の中学で子供を学ばせ、寄宿生活をさせる例もぼつぼつ出始め、この頃には高校や短大に行く子供たちも増えていた。

電気が入ると前後して、ワッジャンからセニヤキまでの道が整備され、雨季でも車の往来が容易になった。ムラには常時二、三台のトラックがあり、九〇年代末になると出産や医療で、多くの人々はパリの病院を利用するようになっていた。

また、セニヤキに保育所ができたのも九〇年代半ばである。保育所と言っても小さな小屋で、そこに二歳から学齢前までの子供たち三十名近くが集まっていた。村内の小学校を卒業した女性二人が保育士を務め、朝から夕方まで子供たちを預かっていた。少し年長の子供たちには文字を教え始めるが、設備もなく、子供たちが所在なげにしていることも少なくなかった。遡って調査開始当時の八〇年代、小さい子供たちはある程度母親が目を見守るようになれば両親と一緒に田畑に行き、大人が働いている間は、その周りで遊んでいた。こうして田畑の仕事も覚えていたものが、保育所の小さな空間で朝から晩まで過ごし、学齢に達するとそのまま小学校に通うようになり、田畑の仕事をよく知らないまま成長するようになってきた。それでも、子供たちが少しでも早く教室の雰囲気慣れ、字も覚えられる上に、田畑で足手まといにならないので、保育所に進んで通わせる親たちが多かった。子供たちの生活も、このように二十年間で大きく様変わりした。

ムラとムラの外

人々にとつての空間は、森と、森を切り開いて作ったムラと田畑とに大きく分けられる。森は霊や野生動物が徘徊する空間であり、女性や子供が用もなく一人で歩き回することは危険視されていた。一方、ムラは、最初に拓くときに土地の守護霊（水と大地の主）の許可を得て森から切り取られた秩序空間である。ここでは、秩序を乱す言葉を発したり（強い呪文、特に年長者への悪口）、争い事や賭け事を行うことは、守護霊に約束された秩序を乱すことになる。たとえば、あるとき私が葬儀の歌を録音すると、ムラの年長者が、それを葬儀以外のときにムラの中で決して聞いてはいけない、聞くなら森か出作り小屋に行くように、と少し緊張した面持ちで言った。また、力の強い呪文の伝授なども決してムラの中では行われず、森や出作り小屋で行われる。森で唱えても秩序を乱す心配がないのである。このような葬儀の歌や強力な呪文が、葬儀や病気もないのにムラや家の中で唱えられれば、子供や女性が病気になったり、田畑の作物に悪い影響が出る、という。秩序空間としてのムラは、森と明確に区別されるのである。

ムラは、山地カレン社会をみる限り少なくとも二十世紀後半から現在まで、社会的にも文化的にも重要な単位であると言つて間違いない。初めて出会った者同士は、まず出身のムラを尋ね合う。ただし、成員は流動的である。ムラからムラへの移住は、さまざまなムラ入りの手続きを伴い、ムラで行う儀礼の参加資格は、在住年数により限定される。

ムラ入りについては次のようなステップを踏むのだと、長老から説明を聞いた。通常、親戚や縁戚を頼つて、ムラ入りを申し出る。新たにムラに入るときには、ヒコと呼ばれるムラの儀礼的リーダーに申

し出る。ヒコはこれをムラの合議にかける。この際、同じ年に同じムラから二組以上の移住者を認めてはいけない、ということだった。受け入れが承諾されると、乾季にまずムラから二名の年長者が新参者を迎えに行く。簡単な家財のみを持って、男性がまず一度ムラにやってくる。それから、再度旧村に戻り、家のメンバー全員とともに村入りする。新参者は三年目によくムラの一員として儀礼に参加する。このように、ムラのメンバーシップは、ヒコの指導のもとで厳密に統制されているのだ。

道路の改善、教育とメディアの普及により、セニヤキを囲む世界に対する空間認識も大きく変化している。同じセニヤキの住人であっても、世代や移動の経験、そして教育レベルなどによって、周囲の空間的な広がり認識はかなり異なっていた。五十代以上の人にとっては、南の首都バンコクよりも、西に国境を越えたビルマの方がはるかに近い土地だった。このムラに二十世紀初頭に移住してきた草分け一族も、もともとビルマの出身だった。また、この年代の男性の中には数人、国境の向こう側、ビルマのシャン州やメーホンソーンの西で、材木の伐採をして働いた経験を持つ者もあった。そのうちの一人によれば、「当時、国境などないようなものだった。こっちにいるのか、あっちにいるのか、自分でもよくわからない。今では、幹線道路を行けば、国境の検問所を身分証明書を持って通らなければならない」。一九五〇年代までは、このように国境を往来していたようだ。その後、部分的に規制は厳しくなっていたが、たとえば象を所有していたチュエラバは私の滞在中も材木積みの仕事で、何の証書もなくシャン州と往来しており、まさに当時のタイ・ビルマ国境の脆弱さがうかがわれる (Krahn 1990)。

学校教育以前の世代の地理的な概念化は、河川の流れと、山々の配置を中心としている。セニヤキの場合はチェム川という、ピン川の支流の水源地域を成す山や丘陵帯をコ・ムスイキ(チェム川の源の地)と呼び、これを一つの「コ」(「くに」という言葉)と見なす。ちなみに、タイはコ・ジョテ、日本はコ・プ

コである。⁽⁷⁾コ・ムスイキにあるムラはほとんどがカレンの集落である。このカレンの土地を離れて、北へ十二キロ行くと、セニヤキの人々もよく働きに行く、通常は、「北タイ人のムラ」と呼ばれるムアンペン（七章参照）と、その向こうに北タイとシャンの混住するパイの町がある。ここは、隣県ではあるが、セニヤキの人々の医療や教育の拠点となっている。一方、東のチェンマイへは、多くのカレンやフモンのムラの点在する一六〇キロの長い道のである（図1-1）。その途中にはいくつかムスイキのカレンが交易の旅の拠点としてきたカレン地域がある。ボケオからチェンマイへの道が一九五八年に開かれるまでは、この途中から南下したところにあるサンパトンの町が交易地であった。ムスイキの人々がチェンマイへしばしば訪れるようになるのは、ボケオからムスイキまでの道が開通した一九七八年以降のことであった。ムスイキから真つ直ぐ南下すると、タイの最高峰ドイ・インタノンに至る。ムスイキが属するメーチェム郡の郡役所は、この山の南側にあるため、通常、郡役所まで出かけるためには遠回りしてチェンマイまで出て、そこから西の郡役所まで行かなければならず、ムラの人たちは一九八七年当時
は乗り合いバスを乗り継いで往復で四日かけなければならなかった。いずれにせよ、このムスイキから南、ドイ・インタノン周辺、そしてそこから西のメーサリアン、メーホンソーンに至る一帯は、カレン人口の非常に多い地域であり、セニヤキの人々にとっておおよそ徒歩で何日、何時間、という遠近の測り方で見当がつく範囲である。さらに、移動経験の豊かな年長者であれば、ビルマや北タイの他の諸地域についても実感をもって語る。

しかし多くのセニヤキの年長者にとって、何らかの実感をもって理解できる地域はここまでである。年長者で移動経験の少ない者にとっては、この向こうに広がるタイの他の諸地域、バンコクや東北タイ、さらには海の彼方の日本、となると、遠近は全くわからなくなる。逆に、若い人でムラの小学校（二九七

八年設立を卒業していれば、セニヤキの位置を地図で概念化して示すことができて、それでは、ビルマまでどれくらいだ、と聞くと、よくわからない。村をとりまく世界とそこでの自分のムラの位置づけの感覚も大きな変化を遂げているのである。

山地のカレン社会も、このようにより大きな地域やタイという国の変遷の中で、生活のただ中から変容を遂げている。その経験は、低地社会が山地に住む人々を、どのようにみてきたか、どのように政策の対象とし、関わってきたか、という大きな構図と無縁ではない。次章では、そうしたより大きな社会の中で、「カレン」であることがどのように外部によって規定され、どのようにそれに応じて自ら変化を経験してきたか、たどってみる。